

# 日本の考古学この10年

都 出 比呂志

## 1 10年ひと昔

私は考古学の立場から過去10年の成果を述べたいと思いますので、先の和田先生のお話のように、推古天皇や聖徳太子などのような具体的な人名は出てきません。また和田先生は、自分で和歌もお詠みになるぐらい文学の香り高いかたであります。私は土を掘ることしか知らない泥臭い者であります。その違いも味わっていただきたいと思います。

「10年ひと昔」と申します。和田先生はこの10年の間で大きな成果を上げた遺跡調査について、非常に綿密にご紹介になりました。古代史の研究者あるいは考古学者に、それぞれ打合せなしに「重要な遺跡」を選ばせると、数が多くなればなるほど内容に差が開いてまいります。いくら重要だといっても基準が違ふし、また好みも違います。とはいうものの、和田先生が取り上げられた古墳時代から歴史時代の多くの遺跡と、私の取り上げる遺跡を比較してみますと、重要なものはほとんど共通しています。基準や好みが違って、特に重要なものはあまり変わりません。専門の立場で遺跡から歴史を复原していく場合、やはり共通したものがあることがわかります。

**膨大な発掘量** 私は、この10年間の考古学の新しい発見によって、それぞれの時代のイメージがどのように塗りかえられたか、ということに重点をおいて話すことにいたします。京都府内だけで言いますと、1989年1年間で約1,600件の発掘届が出されています。これには遠所遺跡(京都府弥栄町)のように大規模なものもあれば、平安宮の構造を解明するために重要だからといって、狭い路地裏の小範囲を調査する場合があります。これらを全部合せて約1,600件です。一方、日本全国では年間約20,000件以上の発掘調査届が出ています。これは大変な数字であります。今から約30年前の発掘届の件数が約350件でありますから、グラフを描きますと「ウナギ昇り」です。この数字によれば、京都府は全国の発掘調査の約8%を受け持っているということになります。大阪府に次いで全国第2位の多さであります。これらの発掘調査のために、若い調査員の方々は連日汗水を流しているわけでありまして、今年(1990年)の夏のように猛暑が続く中でも、炎天下のもと泥と汗にまみれています。重要な発見というのは、ほとんどそうした人達の努力によるものでありますので、この場をお借りして、我々の仲間の仕事に注目して頂きますようお願いいたします。

と思います。さらに、そうした成果が発掘調査報告書として刊行されます。これも分厚いものもあれば薄いものもあります。そうした報告書が全国で年間2,500冊ぐらい刊行されます。今年(1990年)あたりは3,000冊ぐらい、あるいはそれを突破するかもしれません。365日で3,000冊、つまり1日に10冊ほどの発掘調査報告書が刊行されているわけです。このことをイギリスの考古学者に話したところ、「一桁まちがっているのではないか」と言われたものです。イギリスではそれほど多くの発掘調査はしておりませんので当然ではありますが、日本の発掘調査の規模と数は、世界と比較いたしましても少し異常です。この背景に大規模な開発が目白押しという事実があります。しかし、それだけであれば日本は開発で次々と遺跡を壊しているばかりということになりますが、同時に、そうした開発がある場合は必ず事前に発掘をしなければならないというルールが、この20~30年の間に出来上がりました。これは文化財保護行政および民間の保存運動の成果である、ということもできます。こうした積極面をも同時に評価すべきでしょう。

**通説と教科書** 「通説を塗りかえる発見」という言葉は、新聞とかテレビでビッグなニュースを報道する時の常用語であります。ところが、実際に新聞紙上やテレビでそのように報道しましても、学校教育の中ではその成果がなかなか定着していないのではないかと思います。私は高等学校の日本史の教科書の原始・古代部分の執筆スタッフに加わっています。これは直木孝次郎先生が編集を担当しておられる本ですが、この教科書はすでに10年前から発行されていて、また1992年に大改定が行われる予定です。今日これからお話するような新しい情報を教科書の中にできるだけ入れていきたいのですが、それがなかなかできません。いろいろな制約があるのです。ご存じのように教科書は文部省で検定されますが、その際にたとえば、私の関係した教科書でも十数ページの範囲内だけで数十ヶ所にいろいろなクレームが付きましました。私の文章表現が不十分で理解しにくい、という指摘などは有り難いこともあるのですが、内容面にかかわることではいろいろと修正要求がでるのです。そうしたことについては現在いろいろな機会に問題になっております。このことについて今詳しく話す余裕はありませんが、教科書執筆者が悩むことは、誰もが認める通説を書かなければならないという制約です。したがって、そこではユニークで面白いことはなかなか書きにくい。たとえば「三角縁神獣鏡」という、「卑弥呼の使者が中国の魏の皇帝から貰ったのではないか」「いや、そうではない」といった論争の激しい鏡がありますが、この論争は別として、この種の鏡が近畿地方を中心にして東日本あるいは九州へ配られたことは古墳時代の研究者の間では常識です。そういう事実が、古墳時代の倭政権あるいは畿内政権といわれる集団が全国の有力者達と政治的な関係を結んでいった、あるいは影響を及ぼしていったことの非常に有力な証拠である、ということを経典時代の研究

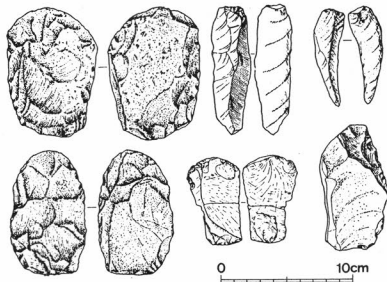
者は理解しています。ところが10年前までは、日本で最もたくさんの部数が発行されている高等学校の教科書でさえこの事には触れていません。私は、この事実は非常に大事だと思えますから、私の関係した教科書には執筆することにいたしました。ただ、なぜこれまで入っていないのかを考えますと、学界で論争があることを理由に、書きこむことをためらう傾向があったからではないかと思うのです。教科書が面白くないもう一つの理由として、入学試験の内容があると思います。会場には高校生をお持ちのお父さんやお母さんが大勢いらっしゃると思います。それから高等学校・中学校の先生がたもいらっしゃると思いますが、試験の時に覚えておかなければならない重要用語というのはだいたい決まっているわけです。教科書では重要用語はゴチック体で書いてあります。たとえば「氏姓制度」などは、必死になって覚えなければならぬ。それからゴチック体になっていなくても絶対に入れなくてはならない用語があります。またそうした用語を取り扱った「重要用語集」という参考書も売っているのです。我々が教科書を執筆する時はそうした用語を参考にしながら書いてくれと注文がつく。また高等学校で教えていらっしゃる先生が我々の原稿を読んで、「この用語が欠落していますよ」と指摘していただく。そうした作業を経ながら教科書作りが進んで行くわけです。ところが、こうした注文が多くなりますと執筆者が独自性を出せる場面は限られ、ますます教科書の中身は無味乾燥になってしまいます。難しい用語を暗記しなければいけないという受験制度の見直しを、大学が本気になって行うことができれば、こうした傾向は変わるのではないかと思うわけです。したがって大学に職をもつ私たちにも責任があります。

本日これからお話しすることは、まだ通説となっていないために、現在の中学校や高等学校の教科書では、充分には取り上げられてはいません。またそれを書くのはまだまだ早いと言われるようなこともあります。しかし5年から10年後ぐらいのちには高等学校の教科書には載るであろうということをお話することにします。

## 2 旧石器時代とナウマン象

**岩宿より古い石器** 先ほど和田先生は古墳時代以降についてかなり克明にお話されましたので、私は古い時代に焦点を絞り、新しい時代は省略したいと思います。また私の場合はどちらかという名前をもった個人は出てこない。人が出てきたとしても庶民生活レベルの地味な話が多いと思います。

まず旧石器時代のことでありますが、現在の高等学校の教科書では、「明石原人」を教えます。それに「岩宿遺跡」(群馬県)を教えます。この岩宿遺跡は、在野の研究者である相沢忠洋さんが発見され、その後、明治大学の先生方が発掘調査された遺跡です。この遺



第1図 群馬県岩宿遺跡の旧石器  
(戸沢充則 1965)

跡はだいたい2～3万年前の遺跡だと言われて  
おります。現在でも確実な石器として、第1図  
に示したナイフ形石器があります。これはナイ  
フのような形をした石器で、これに柄を付け  
れば槍としても使えるし、また皮剥ぎにも使  
えます。それから局部磨製の石斧が図に載っ  
ていますが、これは部分的に磨いてあります。  
かつてこれはヨーロッパのハンドアックス(握  
り斧)に

似ているということで、つい先ごろまでの教科書では「握斧」と書いてありますが、最近の少し進んだ教科書では「石斧」と書いてあります。これは木を加工したりするのに使ったと考えられています。

さて、これまで岩宿遺跡などで発見された石器をもとに2～3万年前のことが解明されてきましたが、この10年間では非常に重要な発見が相次ぎました。その一つは約13万年前の、かなり古い時代の石器が見つかったことです。宮城県では馬場壇遺跡があります。この遺跡では、石器を包含する層の上に火山灰の層がありまして、地質学の先生がこの火山灰の年代について調べた結果、約13万年前の石器と判明したわけです(第2図)。

さらに、旧石器時代の人達の生活内容がかなりよくわかってきました。たとえば馬場壇遺跡では焼き火跡が発見されています。長い間に何回も焼き火をしていますと、その下の土が赤く焼けてきます。それで焼き火の跡であることがわかるのですが、それだけではなく、土の中にある鉄鉱石は、磁石のように常に南北方向を向く性質を持っていますので、土に熱を加えて冷えると当時の南北の方向を固定した状態になります。それを現在の地質学の技術で検知して古い時代の焼き火跡であることが証明できるのです。

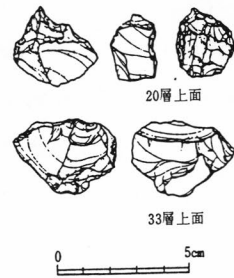
**脂肪酸からナウマン象を証明** もう一つ非常に面白いことがわかってきました。ここから出土した石器に油が付着していました。13万年もの長い期間、雨風にさらされて油が残るのかといった疑問が出るでしょうが、それは当然です。ところが、油は分解しますが、その中にある脂肪酸は残ります。これを調べたところ、その石器に付着していた油はナウマン象のものであると判定されたのです。この脂肪酸分析の方法は、ヨーロッパの考古学で開発され、この10年の間に日本でも発展させられた新しい方法であります。この脂肪酸というのは、動植物をとわず、どの油にも存在します。だから私が、いまこの机の上にあるコップを持っただけで、私の脂肪酸がコップに付きます。したがって、遺跡で発見された石器をへたに触れてはいけなわけです。だから発掘調査もこれからはだんだん難しくなってきます。ヒトならヒト、イノシンならイノシン、シカはシカと、特有の脂肪酸

のタイプがあるそうです。遺跡から出土した脂肪酸と現在生きている動物の脂肪酸とを比較しまして、その種類を知るわけです。そうした技術によってナウマン象を解体し、石器で皮を剥いだといったことがわかります。しかしそれだけではありません。そうした石器類が散乱していた周辺の土を採取し、それから脂肪酸の広がりが見出されると、そこに象が横たわっていたこともわかります。肉眼では全く見えないにもかかわらず、油の広がりが見えるのです。この方法は非常に有力で、今後ますます新しい成果を産むと思います。しかし発掘する時は大変です。直接手で石器や土に触るわけにはいきません。我々が土器や石器を発掘する時は、普通ならこれをビニール袋に入れますが、それは駄目です。ビニールというのは石油製品でありますから、大昔の動物や植物の油がすでに材料に含まれているわけで、それらと混同してしまいます。したがって、ふつうは家庭でも使うアルミホイルに土や石器を収納します。これならば油と関係ありませんので、分析を依頼する先生の所へこれに包んで持って行けばよいのです。日本の旧石器時代の研究で不利なことは、洞窟遺跡の多いヨーロッパなどと違って動物の骨の残りが悪いということです。岩宿遺跡の場合も有機質を分解する酸性の強い赤土であります。しかしそうした所であっても、この方法でもってナウマン象の存在が証明できる展望が開けてきたのは重要です。

さらに、仙台市に富沢遺跡というのがあります。普通の場合、旧石器時代の遺跡は段丘や台地の上に立地するわけですが、この遺跡は低湿地にあって、植物遺体がよく残っていました。旧石器時代の人達の食べ物のかすやシカの糞までが残っていました。したがって、これに似た条件の所であれば、今後ますますいろいろなものが発見されて、旧石器時代の人々の生活内容がますます明らかになってくるものと思います。

### 3 縄文時代の生業と信仰

**縄文農耕論** 次に縄文時代のことに移りましょう。ここでは縄文時代の生活が、現代人が一般に考えているほど貧弱なものではなく、もっと豊かであったこと、そのことが近年の発掘で明らかになってきたことをお話したいと思います。たとえば、縄文時代は狩猟採集の経済であることから、毎日ひもじい思いをしていたのではないかと極端な言い方をしますが、そういうことはなかったらしい。そして、食べ物もイノシシやシカだけでなく、かなり豊富で、多様なものを食べていたこともわかってきました。そういう中でホットな論争になっているのが、縄文時代に何か植物を栽培していたのではないかと、縄文



第2図 宮城県馬場壇遺跡の旧石器 (岡村道雄 1990)

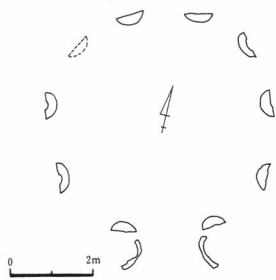
時代には原始的な農業があったのではないかという論争であります。こうした議論が近年の調査成果から再び活発となっております。たとえば、我々の近くでは、福井県若狭の鳥浜遺跡というのがありますが、これは三方町にある三方湖に注ぐ川の河口付近にある遺跡です。ここは低湿地でありますから、普通なら分解してしまうような遺物の残り具合が非常に良い所であります。したがって、ここからは植物の種子などがたくさん出土いたしまして、その中から次のようなものが発見されております。たとえば緑豆。これは豆もやしを作る材料になる緑色の小さい豆ですが、これが見つかっています。それからヒョウタン。その殻が見つかっています。さらにエゴマ。これは私も2・3年前まで触ったことはなかったものですが、ゴマというからゴマの一種かと思っていたら、そうではなくてシソ科の植物であります。粟粒に似た小さな実から油を採ります。また我々が日頃見ているシソとかゴボウの種子、こうしたものも出土しています。この内ヒョウタンというのは、普通は食べません。ただ東南アジアなどヒョウタンを食べる地域もあります。この鳥浜遺跡から出てきたヒョウタンは、実際に食べたというよりも容器に使っていたらしい。ただ、このことだけで縄文人はヒョウタンを食べていたとか、栽培していたとか、簡単に判断するわけにはいきません。ところが、実はヒョウタンというのは日本列島では自生していないといわれています。日本には野生種はないというのが現在の通説です。そうしますと、当時ヒョウタンが鳥浜で生えていたのであれば、誰かがその種子を持ってきて蒔いたことになります。鳥浜遺跡でこのヒョウタンの殻が見つかった所は縄文時代の前期の遺構です。したがって、この時期すでに植物栽培の知恵があったのではないか、これが栽培説です。これはまだまだ学界の承認を得るまでになっていませんが、この発見は縄文時代前期に栽培があったと主張する人達の有力な根拠となっているものです。

ところが、このヒョウタンは栽培されたものではなくて漂着したものではないか、海流に乗ってドンブラコと漂流してきたものではないか、という説もあります。たとえばアメリカの1万年前の遺跡でヒョウタンが出土してまして、これなども野生種のあるアフリカ西海岸から海流によって流れて来たものがアメリカで拡散していったんじゃないか、とも解釈されているのです。そういうことを唱える人は、鳥浜遺跡でヤシの実が出土しているということを注目します。「名も知らぬ遠き島より…」のヤシです。実は、鳥浜遺跡の立地する湾というのは漂着物が比較的溜りやすいところです。海流との関係で、そういう位置に当たるわけです。したがって、ヒョウタンが出土していても、それは南の島から流れて来たものであり、それが鳥浜だけでなく、各地で芽を吹き出して自生したという可能性も考える必要がある、という反論、慎重論を導くのです。しかし、この遺跡で「緑豆」が出ていたり、「エゴマ」があったりすることには、やはり注目しておかなければならぬ

いかと思います。現在、縄文時代の一番新しい時期、縄文時代晩期と言いますが、この時期に「水稻」耕作が始まっていたということが証明されています。しかしこの時期は弥生時代の直前という頃でありますから、この時期から弥生時代的な生活が始まったとして何ら問題はないわけで、ここからを弥生時代と呼べばよいと思います。しかし、それよりもっと古い縄文時代の前期に植物が栽培された可能性の存否については大いに注目すべきであります。鳥浜遺跡ではこのほかに丸木舟も見つかっていますし、繊維を編んで作った縄もあります。縄文時代前期にこれだけの縄を編んでいたことに驚かされますが、この遺跡がいかにか植物質のものが残りやすいか、ということの証明であります。

**イルカ漁と祭祀** 同じく縄文時代のことで、もう一つの話。やはり日本海岸に面した所ですが、石川県の能登半島にある真脇遺跡からは、イルカの骨が大量に出土しました。10m四方の範囲からイルカ285頭分の骨が出てきたのです。これも海岸近くの低地の遺跡であります。真脇町というのは大正年間までそこでイルカ漁をしていたそうです。当時の写真も残っています。舟で湾の中へイルカを追いこんでゆき、これに網をかけたり、突いたりする漁法です。この真脇遺跡は、縄文時代の前期つまり、現在から5,500年ほど前の遺跡ですが、ここでイルカ漁をして、そこで解体していたらしいのです。というのは、発見された骨がブツ切りにされているのです。3分の1ぐらいずつに骨が切られています。動物の先生の鑑定ではカマイルカとマイルカの2種のイルカだといえます。このうちマイルカのほうが大きく、ふつう1頭100kg程の重さがありますが、この1頭の100kgの70%が肉として食べられるとしますと、1頭にして70kgの肉があることになります。285頭すべてが同時期のものでないとしても、いずれにしても膨大な量であります。当然それだけを一度に食べることはできません。そこで保存の方法がどうであったかを考えなければなりません。発掘した人は、どうしたら保存できるか、いろいろ実験したそうです。干し肉にすると臭いはきついらしいが、1年間は保存できることもわかっています。したがって、縄文時代に一度にたくさん獲るとなると、保存技術も含めて大変なことであったと思われるますが、そのような新しい事実もこの真脇遺跡で解明されてきております。

もう一つ真脇遺跡で明らかとなったことがあります。ここでは木の柱の列が見つかりました。柱は直径1mぐらいの栗の大木でありまして、栗の木で直径1mとは凄いです。これを半分に分けて、それを直径6mばかりのサークル状に並べているのです。外側に割った面を揃えて並べています。ここでは柱は地面に埋まっていた部分しか残っておりませんので、元来何mの高さの柱があったのかはわかりません。イギリスには、ストーンヘンジというのがありまして、石の柱を立て並べて何かお祭りをしたのではないかとわれていますが、真脇遺跡ではそれに似た木の柱が並んでいたのです。そうするとこれは何をし



第3図 石川県チカモリ遺跡の木柱サークル  
(宮本長二郎 1988)

た場所であるのか、興味あるところです。同じく石川県の金沢市にはチカモリという遺跡がありまして、やはりここでも木の柱、真脇遺跡と同じような直径で、使っている柱の数も10本という類似した遺構が見つかりました(第3図)。縄文時代に10という数字が意識されていたかどうかはわかりませんが、これも興味深いことです。柱列の上には屋根かけをしていたのか、それともオープンであったのかによって評価が変わってきますが、これは神様を祈った場所ではないか、という説も出されています。これに関連して、

先程のイルカの骨の出土状態を見ますと、これが非常に変わっているのです。真脇遺跡では、単にその場所でイルカを解体しただけでなく、イルカの頭の方向を揃えるなど、骨の向きをいろいろ意識しているらしいのです。似た例としてアイヌの「イオマンテ」があります。いわゆる「熊送り」です。ここでは熊の頭骨を祭りますが、それは自分達に恵みを与えてくれる熊の神が、来年もまた帰って来てくれますように、と祈るものです。真脇遺跡のイルカは、こうした信仰と関係するのではないかと考えられるもので、縄文時代の人々が、イルカを食べるだけではなく、自然のリサイクルを大切にするための儀式をていねいに実施していたであろうことを推測させるのです。

#### 4 弥生時代の農業技術

**進んだ農業** 弥生時代の遺跡の発掘調査でも、いろいろな新しい発見があります。たとえば、弥生時代の初期から農業はかなり進歩した技術をもっていたことが近年の調査で判明しました。ところが高等学校の教科書では、弥生時代の最も古い時期には、農業技術は原始的であったと書いています。弥生時代の初期には、水が常にあって、排水をしなればいけないようなじめじめした湿田で、直蒔きによって稲を作り、弥生時代の後期になってもう少し乾燥した地域で水田を営み、田植えをするように発展した、と書いてあります。またこのように書かないと大学入試の共通テストでは点数を取れないのです。しかし実際はそうではなかったらしいのです。弥生時代の農業技術は日本に伝来したときから、かなり発達した水準のものであったことが証明されつつあります。弥生時代の初期の水田が、福岡県の板付空港のそば(板付遺跡)で見つかっています。そこでは水路を掘り、川から水を引いています。水路に堰を設けて水を上げますと、水田に水が引き込まれ、そして堰の板を落としますと水田から排水される仕組みになっていたらしいのです。現在でも収穫量を上げるために、初期に十分な水を与え、秋の収穫の前には水を落とすといったことが行



われますが、そうした高い技術が弥生時代の初期、一番古い段階の水田ですであつたことがわかってきました。

それから、もう一つ言っておかなければならない事があります。弥生時代に人々はお米を食べるようになりますが、これに関連して、中学生などから「おかずは何を食べていたのですか」といった質問を受けることがよくあります。学校でそのような質問があつたとしても、その答えは、考古学の概説書や教科書、さらには教師用の参考書にもあまり書いてはおりません。しかし、最近ではこうしたことについてもよくわかってきました。たとえば先の板付遺跡では、ムギやアワなどの種子が見つかるだけでなく、それらの花粉さえ確認されています。花粉は化石となって残りますが、それを顕微鏡で見て、種類が特定できるのです。全国の弥生時代の遺跡からはコメ以外に、ムギ、ヒエ、アワ、キビ、ソバなどの穀類、さらに小豆、大豆、緑豆、えんどう豆などが存在していたこともわかっています。したがって、「おかず」としては、シカやイノシシの肉もあり、魚も食べていたでしょう。これらは縄文時代からありますし、それら動物や魚の骨は弥生時代の貝塚からも発見されています。しかしそれだけではなく、ササゲ豆の「おひたし」も作っていたかもしれないということも頭の中にとどめておきたいのです。意外に我々の食事と近いかもしれませんね。こうした事も、この10年間の発掘成果から考えられるようになりました。

**稲株が田植えを証明** また稲の栽培技術に関して、田植えの行われていたことが実証的にいえるようになりました。第4図に岡山県の百間川遺跡の水田の図があります。これは約5m四方の田んぼの図ですが、ここでは稲株の跡が見つかりました。かなり広い面積が調査されましたが、これはその一部です。これらは、稲の切り株が腐り、空洞になったところへ洪水かなにかで運ばれてきた白い砂が溜った形で発見されました。稲の株の窪みに砂が入るので、稲株の跡が明瞭に残るわけです。ふつう発掘道具といえば、竹ベラと手ぼうきを直ぐ連想されるでしょうが、もっといろいろな道具を使います。たとえば喫茶店で使う柄の長いスプーンときには耳掻きも使うことがあります。稲株の跡



第4図 岡山県百間川遺跡の稲株痕跡(高畑知巧 1984)

や水田に残された足の指跡などを発掘する時には、こんな道具が有効です。

さて、第4図の稲株跡をていねいに見ますと、株跡が全体に扇形に配列されている様子がわかります。このことから、「田植え」作業があったと推測できるのです。「直蒔き」であれば、株跡は不規則のはずですが、図では株跡が弧線を描いているのがわかります。人ひとりずつが幅約1mほどの範囲を受け持って植えたであろうことが、これから推測できます。各人の単位をそれぞれ区分しますと、図のように破線で分けることができるのです。さらにこの図からは、7人が列をなして西から東へ、後ずさりしながら田植えをしたことまでわかります。これは大変な発見であります。

それからもう一つ注意しなければならない事は、株の数が現在のものに比べて多すぎる事です。現在の田植えですと、1坪に大体60株程度らしいのですが、この遺跡では、多い所で400株もありまして、非常に高密度であります。このような状態を農学の分野では「密植」と言いますが、これはあまりにも密植過ぎます。しかしなぜ密植したかについては明確にはわかっていません。さらに重要な事は、稲の株の痕跡は残っているものの、雑草の株跡は全く残っていないということです。一つの解釈は、徹底的に除草された、と考えることです。しかし私は1990年の夏、農業の歴史を調べるために農学の方と中国四川省の農村へ行って別のアイデアがわきました。現在の四川省の農業では、日本よりもはるかに稲を密植しています。稲の占有空間を大きくすると雑草が負けて、除草効果をもたらすのかもしれない。当時としては、当然除草作業も行っていたでしょうが、密度高く植えることによって雑草を減らすことを考えていたのではないか、というのが中国へ行った際の私の感想であります。ところで、一つの株からはたして何粒の米が獲れるかを計算すれば、当時の収穫量がわかります。ここの発掘調査報告書では、そうした計算も試みられていて、一反(10アール)当たり大体1~3俵程度との考察がなされています。これまでは弥生時代の「田植え」については、いろいろな状況証拠からしか主張できませんでしたが、このように発掘技術が綿密になってきた現在では、かなり具体的なことまで言えるようになったことはうれしいことですね。

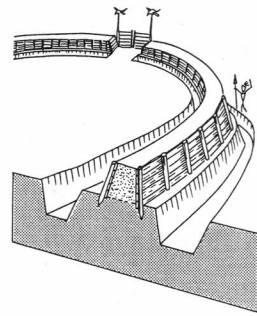
## 5 「倭国乱」から古代国家へ

**弥生後期の割拠** 農業が始まった弥生時代とはどんな社会だったのでしょうか。10年ほど前までは、弥生時代のムラのようすについて、黄金色に実った水田の真ん中に集落があって、牧歌的な生活の風景を描くのがふつうでありました。しかし最近では、弥生時代が疾風怒濤、戦乱の時代であったことが注目されるようになりました。それを雄弁に示したのが吉野ヶ里遺跡(佐賀県)です。あれだけ広い面積の集落に濠を巡らし、土塁を築き、物

見やぐらで敵を見張るといった、具体的な昔の様子を復原できるようになったのです。第5図は、私が少し前に描いた弥生時代の村の防御施設ですが、こういったものは、京都府であれば丹後の扇谷遺跡(峰山町)でもわかってきています。

さらに、島根県の荒神谷遺跡では非常に大量の銅剣が出土しました。358本もの銅剣が一つの小さい穴の中に集中して埋められています。それまでに発見されていた弥生時代の銅剣は総計約300本前後ですが、荒神谷という一つの遺跡だけで一挙に倍になったので大騒ぎになったのです。

さらにこの荒神谷遺跡では銅鐸と銅鉞が近接した別の場所で発見されました。これもおそらく高等学校の先生が生徒から質問された時に困ってしまう材料です。今の教科書には近畿地方を中心とした銅鐸文化圏と九州を中心とした銅剣・銅鉞文化圏が描かれております。それでは、なぜ荒神谷遺跡ではこれらがいっしょに出土するのか、と言った質問が当然でくるでしょう。ちょうどこの地方は両文化圏の境界地域に当たっていますから、一番わかりやすい説明としては、近畿と九州の両方からの勢力の影響下にあった、とすればよいのではないのでしょうか。ところで、最近になって九州でも古い形態の小さい銅鐸やその鋳型が発見されました。それではこの事実はどうのように解釈すればよいのでしょうか。山口大学の近藤喬一さんはこれについて非常に明解な説明をしておられます。弥生時代の古い段階では近畿地方も九州地方も銅鐸と銅剣をいっしょに使う祭りを行っていたのではないか、というのです。実際に九州でも銅鐸は発見されています。銅剣や銅矛も見つかっています。また近畿地方でも銅鐸とともに銅戈も見つかっていますから、どうも古い時期には銅鐸と銅利器とをともに祭りに使った可能性も考えられます。ところが、弥生時代の中期のある段階から後期にかけて、九州では銅利器、近畿では銅鐸と、祭りで使用する道具をそれぞれ選ぶようになったのではないか、というわけです。この近藤喬一説を示すのが第6図です。これによりますと、弥生時代後期では、線で囲っているように北部九州から四国西部、瀬戸内、山陰、近畿、東海、それに関東では、それぞれ祭りに使っている道具が違います。これは非常に重要な問題でありまして、これまでは銅鐸文化圏、銅利器文化圏とだけいっていますが、そうではなくて、もう少し小さい祭りの単位があるらしい。これが、荒神谷遺跡の発見以降、研究者間でいろいろ議論され、支持されつつある解釈です。ちょうどこれは吉野ヶ里遺跡が栄えていた時期にあたります。私は、吉野ヶ里遺跡が非常に重要な遺跡であり、これを保存したい一心から、発見当時に「この遺跡は世界最大



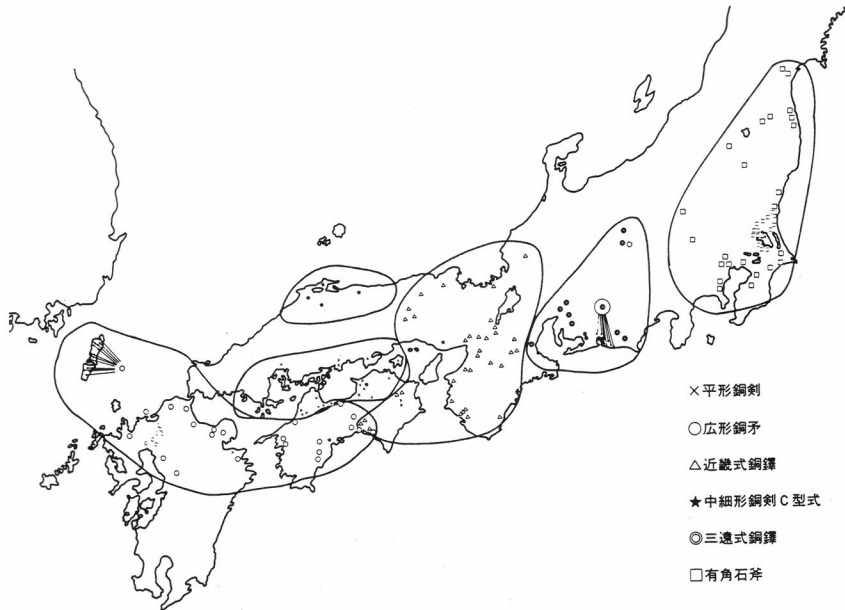
第5図 環濠と土塁の復原図  
(都出比呂志 1985)

級」と言って、専門家間で誇大広告だと笑われたこともありましたが、紀元前後の時期の集落という限定条件を付ければ、この遺跡は、まちがいなく世界第一級の規模をもつ遺跡です。紀元前後の時期の集落遺跡であれほど大規模なものと言いますと、イギリスにメドウン・キャッスルという遺跡がありますが、吉野ヶ里遺跡はそれに匹敵する規模をもつのです。

吉野ヶ里をめぐって邪馬台国論争がよく話題になりますが、吉野ヶ里遺跡は大体3世紀、すなわち卑弥呼の時代になりますと、周囲の大きな環濠は随分埋まっており、防御集落の役目を果たしていない。したがって私の考えでは、この遺跡の全盛期は1～2世紀、つまり卑弥呼以前の時期と考えています。卑弥呼が登場する以前には北部九州の人は、近畿と同じように、大きな環濠集落にたてこもってお互いに戦争をしていたのです。吉野ヶ里遺跡はそれを証明するための、卑弥呼以前の非常に重要な遺跡と思うわけであります。

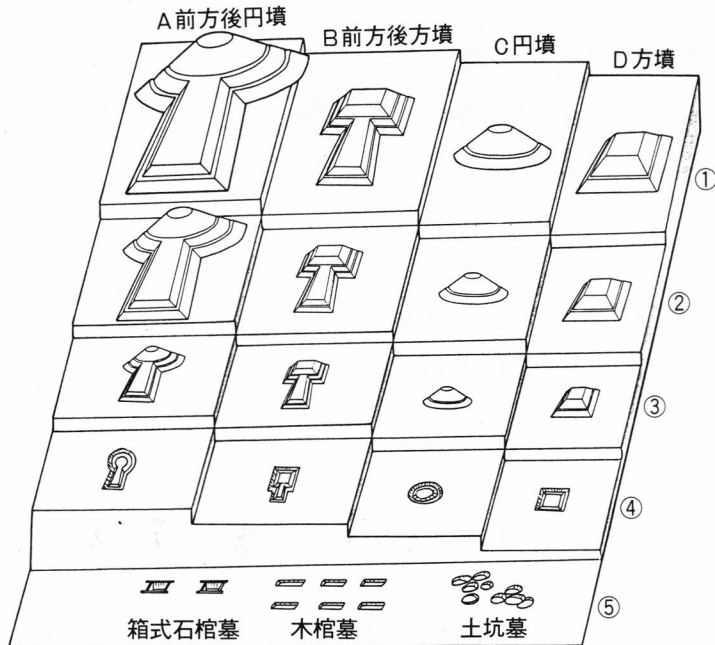
また先に言った荒神谷遺跡から出土しました青銅のお祭りの道具は出雲特有のタイプであり、やはり地域間の割拠状態を示すものと考えられます。こうした環濠集落や青銅祭器の地域色の存在は、まさに中国の文献に書かれています2世紀末頃の「倭国大乱」に一致するわけで、この記事の内容の正しいことを、遺跡のほうからも証明するものであります。

**前方後円墳の出現** そうした時代を経て、古墳時代となります。かつて城陽市(京都府)で芝ヶ原12号墓が発見されましたし、最近になって園部町(京都府)では黒田遺跡が発見されました。これらを「古墳」と呼ぶのか、それとも弥生時代の終末期の墓と見るのか論争



第6図 弥生後期の祭器を共有する6集団(近藤喬一 1985)

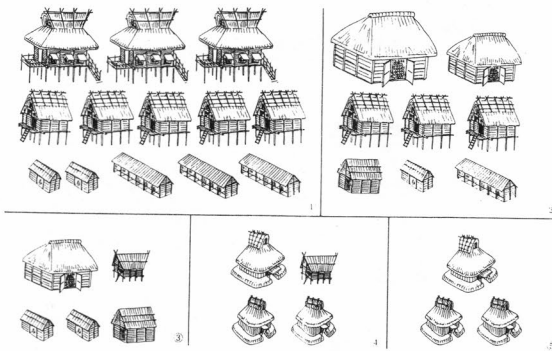
があるように、弥生時代から古墳時代への過渡的な時代についての論争は非常に活発であります。いつから「古墳」が出現したか、といったことにつきましては、ここでは省略いたしますが、そうした時代を経て前方後円墳が登場いたします。



第7図 古墳の墳丘と規模(都出比呂志 1989b)

第7図は古墳の

形をヒナ壇に乗せたものであります。この10年間にわかってきたことは、稲荷山古墳(埼玉県)の鉄剣銘の発見以来とくにそうであります。古墳時代は、従来考えられていた以上に支配の仕組みが発達していたのではないかと、ということでもあります。その仕組みの一つを示したのが第7図であります。古墳時代には大きさと形態の異なる古墳があります。基本的には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の四つがあります。それにまた大・小の差があります。こうした違いは、どうも身分秩序を示すシンボルであったように考えられます。たとえば、長さ200mより大きい古墳の墳形はといえば、すべて前方後円墳です。前方後方墳はそれに次ぐ規模で、大きくて長さ130mから100mクラスです。したがって、墳形には序列があるらしいのです。前方後円墳の方がランクが上らしいのです。ところが困ることには、前方後円墳の中にも長さが30m程度の小さなものもあります。すべての前方後円墳が全ての墳形に優越しているわけではありません。これは大問題でありまして、実は私もこの20年の間、常に悩み続けてきたわけですが、現在では、墳丘の形と規模とは当時の王の序列を示すシンボルのようなものであったらしい、と考えるようになりました。そこで私は、比較の材料に江戸時代の大名の序列を取り上げたいと思います。江戸時代の大名には、親藩・譜代・外様の区別があります。伊達政宗のように東北地方の雄であって、60万石もの多くを貰っている人でも外様です。古墳の形態と規模の差はどうもそれに近いような気がします。前方後円墳といえば親藩・譜代クラスとなりますが、直轄の一番下の



第8図 古墳時代集落の5等級(都出比呂志 1989c)

旗本クラスには5千石以下のものも結構たくさんいた。長さ30mの前方後円墳と似ています。これにたいし、伊達政宗が古墳時代の人であったとすれば、東北地方の雄で大きな実力を持っているといっても、将軍家との距離や格式が違うというわけで、前方後方墳を造ることしか許されなかったのではないか、ということになります。実は

この前方後方墳は、古墳時代の古い時期には大きいものもありますが、5世紀の初頭を境として中央氏族から没落していきます。これも重要なことです。

こうして古墳時代には、大きな前方後円墳に葬られる一番上のクラスから、墳丘に葬られない、マウンドにさえおさえてもらえず、ただ地面に穴を掘っただけの墓(土壌墓)にしか葬られない一番下のクラスまでがあるわけですが、この土壌墓は、最近非常にたくさん見つかってきています。また時代も3世紀の後半以後には出現します。今まではマウンドのある墓ばかり追いかけてきましたが、民衆はマウンドの上におさえてもらえなかったことが、最近のこうした事実からわかってきたのです。

集落の発掘でも、いろいろなことが解明されました。群馬県の三ツ寺遺跡のような豪族屋敷がある一方で、庶民の堅穴式住居があって、社会内に非常に格差のあることがはっきりしてきました。それを示したのが第8図であります。大体5階級程度ありそうです。大王クラスのものには高殿があって、倉庫群をもっています。この倉庫群につきましても、最近よくわかってきました。大阪市の法円坂遺跡では、16棟もの巨大な倉庫が並んでいましたが、仮にここにお米を収納したならば約4万石も入る計算になります。これは古墳時代の一般集落の倉庫と比べて桁はずれに大きい。このように集落を見ただけでも、古墳時代には階級差が非常に進んでいたことがわかってまいりました。

先の稲荷山古墳の鉄剣の銘に「杖刀人」ジョウトウジン(タチハキノヒトとも訓む)とありますが、「人」というのが出てきます。それから同じ時代の江田船山古墳(熊本県)の刀に「典曹人」という「人」が出ていましたが、かつて直木孝次郎先生が文献の上から、「人制」という官人組織が少なくとも6世紀には存在していたのではないかと、ということや「蔵人」や「酒人」など、蔵を番する人とか酒造りに関係する人などを取り上げられたことがありましたが、考古学的発見から、こうした身分編成が少なくとも5世紀には確実に存在することもわかってきました。そこで、大王が地方を支配していく時に、こうした「人」

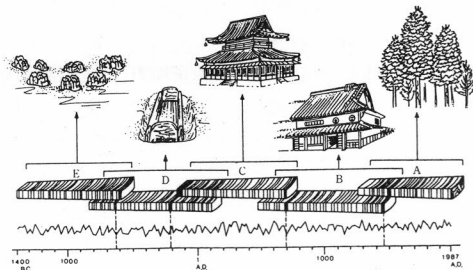
という官人組織を整えていったであろうこともわかってきたのです。

## 6 重要な遺跡の現地保存

最後に私が申し上げたいことは、遺跡をできるだけ現地で残したい、ということです。遺跡の中には、開発でやむなく壊されてしまうものも多いのですが、できる限り遺跡を現状保存したいと思います。この10年間では、発掘調査技術は長足の進歩を遂げました。弥栄町の遠所遺跡のように、非常に大規模な遺跡を綿密に完全に調査する。また、岡山県の百間川遺跡のような稲の株跡をつま楊枝の先で緻密に掃除する、といった方法だからこそ、石川県の真脇遺跡のようにイルカのお祭りが解明されたりもできるわけでありました。こうした技術は今後ますます進歩するでありましょう。したがって、調査し遺跡がなくなった後で「しまった」と思っても遅いわけで、そのために遺跡をできるだけ現状で残さなければならないのです。

さらに、最近では自然科学の分野の協力が非常に進んできました。先の脂肪酸もそうですし、植物や動物でも、これは緑豆だ、これはイルカだ、とか明確にいえるのは、動物学者や植物学者など専門家の協力を得て、初めて可能です。また、三角縁神獣鏡が中国製か日本製かという論争がありますが、これについても、鉛の分析から次のようなことがわかっています。鏡は青銅器ですが、青銅といえば銅と錫と鉛の合金でして、鉛を分析してみると、中国でしか採掘されない鉛とか、日本で採れた鉛など、いろいろなことがわかります。そして、少なくとも三角縁神獣鏡には中国の鉛が材料として使われていることはまちがいないことですが、こうしたことも自然科学の力によって解明されてきたわけです。

滋賀県紫香楽宮遺跡の発掘調査で、出土した樹の年輪によって築造年代が測定されました。第9図はそれに関するものでありますが、年輪からどのようにすれば年代が測定できるのか、といいますと、たとえば、ある遺跡の上に縄文杉のような樹齢何千年という樹が発見されたとします。こうした大樹はどこかの遺跡でも生えているとは限りませんが、その大樹がある遺跡の上に生えていたとすれば、これは明らかにその大樹より古いといえることができます。この方法が一番素朴な「年輪年代法」であります。ところが、奈良国立文化財研究所の光谷拓実さんを中心とする研究は、もっと複雑です。1本の樹だけでなく、何本もの年輪パターンをコンピューターで解析して同じパターンの樹の



第9図 年輪年代法の原理(光谷拓実 1989)

比較から年代を測定する方法が開発されました。図はスーパーマーケットで馴染みのバーコードに似たものですが、樹の成長というのは、雨がよく降り、そして気温が高いと年輪幅が厚くなり、逆に寒ければ薄くなりますが、このパターンがこうした図で表せるのです。今のところこうした方法で約2,000年間の年代がわかるようになりました。樹の皮まで残っていれば、その樹がいつ伐採されたかは、1年の誤差の範囲内でわかるわけです。これは大変なことです。この方法は、何も考古学の分野だけで利用されているわけではなく、絵画などの真贋論争にも役立っています。たとえば、絵画の額縁の材料の年輪を測定し、それが現在のものか、それとも古いものか、判定する時にも有効です。さらに年輪年代法の副産物として、年輪を見ることによって、ある年の寒暖の気候の変化がわかり、さらに日照りの多少から飢饉の様子まで想像できるわけです。

こうした研究法の開発によって、我々がこれまでわからないと諦めていたことまでがわかるような時代が近い将来必ずやって来る、いや、すでに来ています。そのためにも、遺跡をできるだけ現地で残し、将来の考古学者が発掘調査して、新しい技術でもって歴史を復原する余裕を残しておきたいと思います。我々が現在の技術水準だけで発掘してよいというのは傲慢であって、それではいけないと思います。

ところで遺跡を保存することは、考古学者だけではとても無理なことです。市民の方々の絶大なご支援が必要であります。どうぞ京都府の埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査した遺跡をはじめ、京都府内にかかわらず、全国の遺跡の保存に力を貸していただきたいと思います。

(つで・ひろし=大阪大学教授・当センター理事)

<挿図出典>

- |       |       |                                    |
|-------|-------|------------------------------------|
| 岡村道雄  | 1990  | 『日本旧石器時代史』 雄山閣                     |
| 近藤喬一  | 1985  | 「銅剣・銅鐸と弥生文化」『古代出雲王権は存在したか』 山陰中央新報社 |
| 高畑知巧  | 1984  | 「水田遺構」『百間川原尾島遺跡2』 岡山県教育委員会         |
| 都出比呂志 | 1989a | 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店                 |
| 都出比呂志 | 1989b | 「古墳時代の中央と地方」『古代史復元』6 講談社           |
| 都出比呂志 | 1989c | 「大開拓と階層差の増大」『古代史復元』6 講談社           |
| 戸沢充則  | 1965  | 「関東地方の先土器時代」『日本の考古学』I 河出書房新社       |
| 光谷拓実  | 1989  | 「年輪で遠い過去の年代を測る」『古代史復元』5 講談社        |
| 宮本長二郎 | 1988  | 「さまざまな家」『古代史復元』1 講談社               |

本稿は、1990年11月3日(土)京都市社会教育総合センターで行った当調査研究センター10周年記念特別講演会「埋蔵文化財この10年」での、題名と同名の講演記録を活字化したものである。